

特別記事

Interview

好奇心と創造性、そして既に確定した「構造化」を打ち破ること 第52回ENEOS音楽賞・洋楽部門の受賞者が決定

取材・文：編集部

ENEOSホールディングス株式会社日本の児童文化・音楽文化の発展に大きな業績をあげた個人または団体を顕彰する「ENEOS児童文化賞」(1966年創設)と「ENEOS音楽賞」(1971年創設)。52回目となる後者の今年度の受賞者が決定した。

作曲は「生きよう」証

第52回ENEOS音楽賞の洋楽部門において、本賞には野平一郎が選ばれた。同賞は野平の作曲家としての国際的な活躍にとどまらず、ピアニスト、指揮者、研究者の他、音楽ホールの芸術監督といった運営面での成果など、その縦横無尽の活躍に対して贈られる。そんな野平に自身の多岐にわたる活動について、語っていただいた。

——作曲家としてはもちろん、ピアニスト、指揮者など、縦横無尽に国内外を問わず活躍をされておりますが、ご自身の創作活動のエネルギーはどこから来るものでしょうか。

「ちょっと口幅つたい言いかたですが、音楽への愛情、そして新しいことへの興味だと思えます。私はそれほど恵まれた環境から出発したわけではありませんでした。フランスに留学しようと思ったのは遅く、大学院を出た25歳のときでしたし、留学前にコンクールを経験したわけではありませんでした。ですから、来た仕事はすべて受けるというのが、自分の鉄則でした。作曲を細々とコンスタント

Interview with Ichiro Nodaira



野平一郎
©YOKO SHIMAZAKI

■公演情報

- ①静岡・室内楽フェスティバル2022
アルディッティ弦楽四重奏団&野平一郎 (p)
〈日時・会場〉9月3日15時・静岡音楽館AOI
〈曲目〉クセナキス《6つのシャンソン》、《ディクタス》、他
〈問合せ〉静岡音楽館 AOI 054-251-2200
- ②協団 彩 メゾソプラノ リサイタル
〈日時・会場〉10月5日19時・川口総合文化センター・リリア
〈共演〉丸山貴大 (p)
〈曲目〉ロッシェニ《セビリヤの理髪師》から〈今の歌声は〉、モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》から〈あの人でなしは私を欺き〉、他
〈問合せ〉リリア・チケットセンター 048-254-9900



協団 彩
©Ambra Iride Sechi

に続けていたことを別にすると、パリでは現代音楽のアンサンブルのピアノを弾くことからはじめ、さらにソロを頼まれるようになりました。古典派の作品や室内楽への取り組み・共演が増えたのは1990年に帰国してからで、さらに指揮活動も増えました。そして、自分がここまで来られたのは師に恵まれたからです。特に永富正之、間宮芳生両先生が考えてくださった道を歩むことで、東京藝術大学の基礎教育や静岡音楽館でのコンサート企画のキャリアを積み、つながっています」

——ご自身のこれからの活動において、特に重点的に力を入れたいものはありますか。

「作曲はどこまでも続けていきたいです。これは生きていく証のようなものでもあります。これまでは新しい作品の紹介に随分時間を割いてきましたが、いまはどちらかというと古典作品を再度見つめ直してみたいです。演奏は、現在はピアノよりも指揮に興味がありますし、あらゆるレパートリーに挑戦したいですが、こればかりは自分の思い通りにいくとは限りません。ドビュッシーの作曲研究は、いま最も興味があるもので楽譜の出版を予定しています」

——今日の日本のクラシック音楽界、特に聴衆（作品を受けとる側）と演奏家（作品を提供する側）との関係性について、どのように思われますか。

関係にあるのではないのでしょうか。どのホールに行っても、それを感じます。提供する側は、さらに多様性を持った音楽を追求していくこと、多様なコンサートのかたちが求められていくと思います。これも多くのホールが考えていることでしょう。ここでも好奇心と創造性、そして既に確定した「構造化」を打ち破ることが必要で、それには演奏側、作曲側、企画側のすべてが、この創造という芸術の神様のような存在を大切にしていることが不可欠となるでしょう」

また同洋楽部門奨励賞には、現在イタリアを中心に国際的な活躍が注目を集めているメゾソプラノ、協団彩が選ばれている。